

学 位 論 文 の 要 旨	
氏 名	宋 多情
学位論文題目	<p>島嶼のエコツーリズムと世界自然遺産 —奄美群島の事例を中心に—</p>
<p>本論文は、奄美群島、特に奄美大島と徳之島を事例に、奄美のエコツーリズムの特徴を明らかにするとともに、島嶼のエコツーリズムとは何かについて考察を試みるものである。日本国内でエコツーリズムが最初に発展した地域は屋久島や小笠原諸島などの島嶼であり、これらの島はまた、世界自然遺産と結びついている。ゆえに、本研究は、世界自然遺産と関連した島嶼地域におけるエコツーリズムを行政、ガイド、地域住民の3つの視点から考察した研究である。特に、第2章と第3章においては、行政がエコツーリズムを日本にどのように導入したかに注目し、その流れを世界遺産との関連で、屋久島、小笠原、西表、奄美群島の順に記述した。次に、第4章と第5章では、「ガイド」に注目し、行政の動きにある程度影響を受けながらも、ガイド自らの価値認識をもとに自然環境を選択し商品化を行なっている状況を概観した。そして、第6章では、もう一つのホスト主体である「地域住民」の価値認識に注目している。本論文の構成は以下の通りである。</p> <p>第1章の序論では、研究の背景として、島嶼地域における観光の特徴を記述した上に、日本の世界自然遺産とエコツーリズムの概念化を行った。そして、エコツーリズムに関する先行研究について、文化人類学におけるエコツーリズム研究を中心に整理し、本研究の視点や目的、研究方法や論文の構成について述べた。</p> <p>第2章では、奄美大島の事例との比較考察を行うための土台として、屋久島と小笠原諸島、そして奄美群島と同じ世界自然遺産の候補地である西表島のエコツーリズムがどのように展開されてきたのかを概観した。さらに、ガイド事業者の分析とツアー内容を考察することで当地におけるエコツーリズムの実態を明らかにした。</p> <p>第3章では、奄美群島におけるエコツーリズムの導入について、政策と地域の人々の反応という2つの側面から考察した。奄美群島の主要政策である「奄美群島振興開発」において自然がどのように捉えられてきたかを、観光と環境保全に関する施策を中心に検討した。そして、世界自然遺産登録推進による施策の変化とその過程でのエコツーリズムの展開を追った。一方、奄美大島の地域住民の間では、1980年代末から自然観察会や自然保護運動が展開されていた。そして、エコツーリズムについても、エコツアーに該当す</p>	

る観光形態が 1990 年代前半にはすでに民間レベルで実践されていたことから、奄美大島の初期のガイドたちにとって、エコツーリズムは言葉の受容に過ぎなかったことを明らかにした。

第 4 章では、自然を語る「ガイド」に焦点を当てて、奄美大島におけるエコツーリズムの特徴を明らかにした。奄美群島広域事務組合が 2007 年から、世界自然遺産推進に関する業務を行うことになり、最初に取り組んだのが、ガイドの制度化である。奄美大島エコツアーガイド連絡協議会の登録ガイド 61 名を対象に、定量的データから各々の異なる背景や履歴等の質的データまで網羅的に収集し、分析を行った。そして、奄美大島ガイドの特徴の一つが、島内出身者が移住者より多いことであり、結果的には、ガイドの制度化を主導した広域事務組合の意図に沿うものであったことを確認した。

第 5 章では、徳之島のガイド事業者を中心に、徳之島におけるエコツーリズムの特徴を明らかにしている。農業が基幹産業である徳之島は、新婚旅行ブームにわいた 1960 年代後半（昭和 40 年代）を除くと、観光産業の比重が小さいため、島外からの大きな収入源にはなっていない。また、ガイドが必要とされる観光が成り立っていなかったため、島内でガイド業に携わっている人は非常に少なく、連絡協議会も必然的に少人数の組織になった。徳之島ガイドの特徴は、前述した連絡協議会が機能していないことから、地元の NPO 組織がガイド連絡協議会の役割を代わりに果たしていること、また、自然環境保全の仕組みとしてのエコツーリズムを実践していることを検証した。

第 6 章では、奄美市住用町におけるマングローブカヌーツアーと夜の野生動物観察ツアーを事例として、最初に、地域住民が周囲の自然環境を価値あるものとして認識し、生活にどのように利用してきたかを記述した。続いて、地域住民の利用に並行する外部からの価値評価と自然環境の利用が地域住民にどのような影響を与えたのか、そして、それらの過程を経て、地域住民にどのような新たな価値認識が生じたのかを明らかにした。

第 7 章では、以上の内容を踏まえて、奄美のエコツーリズムの特徴とは何かを、他の 3 つの島の事例との比較から考察した。そして、全章を通じて見てきた「島嶼」のエコツーリズムと世界自然遺産に関する議論から、島嶼におけるエコツーリズムの意味について考察を試みた。

第 8 章の結論では、以上を総括して本論文の意義を再確認した。

以上